小川国夫「静南村」に見る「内的独白」について
—フォークナーと『マクベス』に関連して—

A Study of “Interior Monologue”
in Ogawa Kunio’s “Shizunami Village”
— In Reference to William Faulkner and *Macbeth* —

石井 洋子
ISHII Yoko

Abstract: OGAWA Kunio is one of the representative modern Japanese authors and he is a devout Christian. This thesis is aimed at considering “Shizunami Village” and *The Sound and the Fury* and *Macbeth* from the viewpoint of comparative literature. There are some similar points between OGAWA Kunio’s “Shizunami Village” and Chapter of William Faulkner’s *The Sound and the Fury* and *Macbeth*. They are mainly similarities in both ‘interior monologue’ and expression of ‘shadow’, ‘stream of consciousness’ and ‘structure of story’. In this research, this point has been taken into deep consideration. And the structure of the novel “Shizunami Village” has been duly analyzed. This thesis is written, from my comparative literature perspective.

Keywords: OGAWA Kunio, “Shizunami Village”, William Faulkner, *The Sound and the Fury*, *Macbeth*, interior monologue, shadow, stream of consciousness, structure of story

小川国夫、「静南村」、ウィリアム・フォークナー、『響きと怒り』、『マクベス』、内的独白、影、意識の流れ、物語の構成

はじめに

小川国夫の「静南村」は、雑誌『文芸』1972年（昭和47）3月号に発表された。四百字詰原稿用紙で150枚の短編である。直ちに文芸批評の対象となった。例えば、『産経新聞』1972年（昭和47）2月28日夕刊に筆を執った磯田光一は、「『静南村』は、これまでの小川氏の作品のうちでは、ゆとりのある部類に属している」云々と述べている。そして、単行本『試みの岸』1972年（昭和47）に収まっていく道筋の作品に多大の注視の目を向けている。

もとより雑誌に掲げられた順でいえば、第1作が「黒馬に新しい日を」、第2作「試みの岸」に続く第3作目の作品であるが、これが単行本『試みの岸』に収まる際、その順序は「試みの岸」―「黒馬に新しい日を」となり、「静南村」はその3作目に位置している。1作目と2作目の順序が入れ替わったということについての作者のコメントはない。明らかに3連作をなしているということであるが、作者にとってこの措置に意味をこめていたことは疑い得ないところである。

おそらく、人物造型を共通化してストーリー・テリングを図る上で都合がよかった、ということであろう。血のつながりをなす人物たちの物語の役柄でいえば、まず法月十吉が「試みの岸」の主人公を演じ、「黒馬に新しい日を」では主人公が余一（十吉の甥）へと入れ替わり、その余韻の中で佐枝子（余一の叔母の立場にあり、かつ十吉に対して偏愛）が主人公となっているこの下層階級ともされる人物の設定と、その役柄の連関上、作者は、前記したような作品配列、すなわち、「試みの岸」―「黒馬に新しい日を」―「静南村」の順序で一連のオムニバスドラマ形式を完遂したものと判断するに至るのである。

本稿は、その3番目に奏でられたロマネスクの短編としての創作世界へと分け入り、考察を進めるものである。すでに考究してきたように、1作目の「試みの岸」では、人間存在の意味と危機といったものが抽象化した舞台の中で描出されている。2作目の「黒馬に新しい日を」でも同様の抽象性が物語の舞台としての〈トポス〉をなしているのに対して、この3作目の「静南村」は、フィクション絡みながらタイトルは明確な地名である。このこともまた「静南村」というロマネスクに、作者がこめた創意の施しとして看過できないところである。

地名と物語展開——その絶妙な関係性に着目するならば、おそらく、「静南村」の急所へと肉迫していけることになるのではないか。まずはこのような切り口から、作品世界の扉を開けてみることにしよう。

「静南村」の主人公佐枝子は、十吉と最も関連が深い。佐枝子を中心とする彼ら登場人物たちは、縁戚関係にあることが判明している。「静南村」における佐枝子の物語は、この一族の中における悲恋である。

その語り明かしの手法は、ここでも1人称の視点位置に立ち、ヒロインである佐枝子の眼で外界を眺め、かつ身边から自己の内部へと深く及んでの〈内的独白〉の形式を常套としている。したがって、現在のもとより過去へと遡及せずにはおかない彼女の視点は、おのずと自己の内なる闇をさまよい、あるいは現実と幻想との境界を出入りしながら、延々とした切ないナレーション（内的独白）を紡ぎ出していく。佐枝子の内的独白の描写は、フォークナーの『響きと怒り』の第2章の主人公、クエンティン・コンプソン(Quentin Compson)の最も特徴とする〈内的独白〉と重なっている。また、「静南村」は、フォークナー作品が特徴とする構図とも類似すると考えられる。その上、小川国夫の小説は、『聖書』旧約・新約を基底に秘めている場合がしばしばある。『聖書』からのメッセージがどの

あたりにあるかについて探りを入れることも必要と考えている。

以上の点をチェックし、フォークナー作品を考察すると同時に、フォークナーの『響きと怒り』における描写方法は、シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）からの影響が大いにあると言われている。それらのことを考慮に入れながら、小川国夫の「静南村」の主人公、佐枝子の〈内的独白〉との関わりを考えてみたいと思う。

1. 佐枝子とクエンティン・コンプソンにおける〈内的独白〉の類似性

前作の「黒馬に新しい日を」の終局において、佐枝子の〈死〉は、読者に知らされている。その限りで一作一作が完結性をなす。このことは自明であるが、小川国夫の「静南村」という物語で主役を張る佐枝子は、再生ではなしに、ここではヒロインとして精彩を放つ生き様をさらしている。

ところで、作話の手法として一人称制限視点を用いている本物語では、終始、佐枝子の〈内的独白〉の〈劇〉が展開している。

判りきった途なのに、迷いそうに思えたので、わたしは渚に沿って行った。なぜあんなに融通がきかなかつたのだろう。あの狭い途が見え続けた。それと、砂利を踏む音が聞え続けた。渚が崖の裾を廻っているのが白く浮かび上がり、だんだんはっきりして来た。

1)

引出の文脈からみると、「判りきった途なのに」から「砂利を踏む音が聞え続けた。」までは、叙情的な心情把握であるとするならば、「渚が崖の裾を廻っているのが白く浮かび上がり、だんだんはっきりして来た。」は、幾分叙事的な感覚で捉えられている。その微妙なコントラストによる結構がさらに読者を引き寄せていると考えられる。佐枝子について、斯界のオーソリティである大橋健三郎は、次のように述べている。

だが、第三部の「静南村」の佐枝子の狂気となると、もはや「トンネル」と言うより、彼女の父が小学校へ寄付した「ジャワのお面」のような、死の穴にほかならぬ。山の高みのない、鋳物工場に毒された岸辺の娘でどこか頑な彼女の十吉への愛は、彼の投獄によって歪みに歪み、幼かった頃の釣場での十吉との触れあいの楽しい記憶と裏腹になった、現在の死の幻想を生み出す。そしてフォークナーの『響きと怒り』（1929）を思わせる徹底した内的独白の手法は、現代人の閉ざされた心と、その果ての、そこから何かが蘇るかもしれぬ一種黙示録的な死の姿を暗示することに成功し、このすぐれた長編三部作を意味深く鮮やかに締め括っている。²⁾

上掲の大橋健三郎の所見に、筆者は違和するところがない。まったくその通りで、彼が言っているように、佐枝子の十吉に対する愛は、一方的な傾向が多く見られている。佐枝子にとって、十吉の投獄という状態は、彼女の気持ちを根底から覆して〈憎しみ〉となったのである。その後、佐枝子は、投獄された刑務所の中の十吉に面会をした。大橋健三郎が言っているように「幼かった頃の釣場での十吉との触れあいの楽しい記憶と裏腹になった、現在の死の幻想を生み出す。」との分析箇所、すなわち、佐枝子の一人称の内的独白は、過去へと遡及して行くという果てしなく続く幻影の世界である。佐枝子の内的独白は、フークナーの『響きと怒り』中の当該シチュエーションとの呼応を思わせている。すでに取り上げている、佐枝子にとって父の土産の「ジャワのお面」は、「お面」の表から裏へと突き抜ける〈死の穴〉のイメージとなっているのである。それは、佐枝子の終末を象徴するものであると思われる。

『響きと怒り』において、第2章において主人公であるクエンティンの語りは、〈ぼく〉という一人称の語りである。その日1910年6月2日、朝の7時から懐中時計の時間を意識することから始まっていた。その時計は祖父のものであったけれど、祖父から父へと贈られてきたものである。そして、父からクエンティンへと贈られた。父はクエンティンに言った。「わしはなにも、お前が時間を忘れないためにこれをやるんじゃあない。むしろたまにはしばらく、時間を忘れるために、時間を征服しようとして一生を無駄にしないために、これをやるんだよ。」³⁾ クエンティンは、父の言葉の意図を理解していた。「時間を忘れるために父は懐中時計を息子に与えた」。のだが、クエンティンの脳裏は父の言葉通りにはならなかった。彼の脳裏はカチカチという時計の秒針に鋭く反応していた。時間は一秒でも彼から離れることはなかった。9時15分という時間が示す時計の針は、長針と短針が水平に伸びて風に向かっていて鷗の姿を思わせている、とあるところ——すなわち、その水平な針が、クエンティンの悲しみを抱きかかえているという象徴的場面である。クエンティンの内的独白の表現方法は、佐枝子の内的独白と重なっている。佐枝子は、東海の小さな村に住む貧しい娘である。これに対して、没落の途上にあるとは言うものの、クエンティンは、コンプソン家の長男である。このように佐枝子とクエンティンを比較した時、基本的に両者の間には、明らかに違いがあることは否めない。しかし、佐枝子とクエンティンの両者の心の暗闇にある苦悩、すなわち、一人称による内的独白の表現に関しては同じような場面が重なっている。佐枝子の内的独白は、クエンティン・コンプソンの内的独白と類似している。

2. 佐枝子とクエンティン・コンプソンにおけるカタストロフィー

佐枝子の終末の描写を見よう。それは、夜の蟹戸で、焚き火を背にして海に写っているときの佐枝子の〈影〉について、普通の二倍もあつたとされている。佐枝子の〈影〉には、

「ジャワの面」にあったような他界へ通じる穴が開いていた。その〈影〉を突き抜くことができれば他界である。

一水を掛けて、火を消してよ。

母さんはなにか呟いていて、返事をしなかった。わたしは波打ぎわへ行った。どうしたらいいのか、とにかく、海の水を運んで火を消したいと思った。それを見てから、蟹戸へ行かなければ、と思っていた。でも、母さんがなにか呟いているのが気になり、それが声になるまで待っていようとは思った。わたしは焚き火を背にして、しぶきの幕に映る自分の影を見ていた。それはわたしよりも二廻りも大きく、人の形の穴に見えた。

4)

上掲はカタストロフィーを措定した終局の描写である。これによれば、佐枝子は過去における母との会話の中から、火を消さなければならないと思いながら波打ぎわへと行った。そして、佐枝子の後には焚き火があって、佐枝子の〈影〉は大きく夜の蟹戸の海のしぶきと共に映し出されていた。佐枝子は機械的に自分の〈影〉の穴に入って行ったと思われる。佐枝子が、自分の〈影〉の中へと入って行くことと、同じようなプロットの小説がある。それは、小川国夫が愛読している作家、梶井基次郎(1901-1932)⁵⁾の『檸檬』(1931)の中に収められている短編「Kの昇天—或はKの溺死—」、というタイトルの小説である。「Kの昇天」は、〈影〉を自分自身の分身と思っている青年の話である。その青年も病があり、彼の神経は鋭く尖っていたという描写がある。「Kの昇天」の語り手がK君の真意を聞く場面がある。佐枝子と同じように自分自身の〈影〉の中に引き込まれて行くという。K君の体は沖へ沖へと流されて行き、魂は、非現実の空間の中に消えて行くのである。「Kの昇天」から、K君が昇天する場面を次に挙げて見よう。

K君は、影は阿片の如きものだ、と言ってました。若し私の直感が正鵠^{せいこく}を射抜いていましたら、影がK君を奪ったのです。(略)K君は、病と共に精神が鋭く尖り^{とが}、その夜は影が本当に「見えるもの」になったのだと思われます。(略)影の方の彼は遂に一個の人格を持ちました。K君の魂はなお高く昇天してゆきます。そしてその形骸は影の彼に導かれつつ、機械人形のように海へ歩み入ったのではないのでしょうか。⁶⁾

上掲の結核療養中の身であるK君は、いわゆる、ドッペルゲンガーの状態である。〈影〉に引かれて海の中に入って行ったのは、K君である。しかし、〈ぼく〉という主人公の存在が別にいるのである。〈ぼく〉によって描出されているのは、K君であるのだ。「影の方の彼は遂に一個の人格を持ちました。」とあるところ、それは、〈影〉の方の〈ぼく〉が、人格を持ったことになる。

非日常の世界に心を奪われた K 君の体は死に心は昇天したのである。K 君の昇天と佐枝子の昇天は、みずからの〈影〉に入ってしまったことに変わりはない。実に微妙なところであると言えるであろう。小川国夫が、梶井基次郎の愛読者であったことを思うとき、K 君の〈死〉の様態が佐枝子と重なってくるのである。

さらに佐枝子と十吉との関係がドッペルゲンガーな関係であるということが判明してきたのである。それは、〈すでに引用した佐枝子の究極をなす孤独の世界からの幻想、すなわち、蟹戸の夜の岩の上の佐枝子の幻想としての十吉〉が、佐枝子の孤独な状態が生み出した二重人格の状態である。

フォークナーの『響きと怒り』における第 2 章の主人公クエンティンの一日は、意識の流れとして描かれている。その日(1916年6月2日)、彼は、懐中時計により目覚める。彼の心を捉えるのは時間であり、その時間が彼を束縛しているのである。彼は、自ら自分に課した厳しい掟があった。それは父の教えであり、厳しいピューリタンの教えであった。そのようなクエンティンが落ちていく倒錯した心象を次の場面から見よう。

but I couldnt stop she held my head against her damp hard breast I could hear her heart going firm and slow now not hammering and the water gurgling among the willows in the dark and waves of honeysuckle coming up the air my arm and shoulder were twisted under me 7)

(だがぼくはなきやむことができず彼女はぼくの頭をそのぬれたかたい胸のうえにだきしめた ぼくには彼女の心臓がもう激しくはなかったが着実にゆっくりうっているのがきこえ水は暗くなった柳のあいだでぼこぼこ音をたてながらながれすいかずらの匂いがつぎつぎに空中にたちのぼりぼくの腕と肩は体のしでくねられていた)

上掲の引用文は『フォークナーの文体』において著者の四方田敏により引用されたものである。⁸⁾ この引用文に対して、次のようなコメントを付してある。「川の土手にいるクエンティンの妹に対する相姦的な性の欲望と、処女を捨てたキャディの性的本能とが結びついたクエンティンの『性』の頽廃意識にすいかずらの匂いが執拗にからみついてくるのである。」⁹⁾ 筆者もクエンティンの「性」に対する頽廃意識について異議を挟むところはない。水鬘の匂いは、クエンティンの立ち上がることができない自我の崩壊の様相を示している。

クエンティンは、大学の寮での親友、シェリーヴにさえ自分の気持ちを打ち明けることはなかった。彼の日常は全く違った領域に入っていたと考えられる。

クエンティンにとって、水鬘の花の香りはキャディそのものであったのだ。彼の「性」の意識は乱れていた。妹キャディに対する近親相姦の妄想は、ますます深くなっていて、

その限界はなかったのである。

次に挙げるのは、クエンティンに付きまとう水鬘の花の香りがあたりの共鳴音と融和するように感ずる彼の意識の流れとして描写されている場面である。

in the woods the tree frogs were going smelling rain in the air they sounded like toy music boxes that were hard to turn and the honeysuckle ¹⁰⁾

(森の中では雨蛙が空気のなかに雨のにおいをかぎとってうごきだしていた。そして廻りのわるいオルゴールみたいな音をたててないておりまたすいかずらがおいだした)

この水鬘の花の香りの描写は、その、意識の深層では、なおも準備され、露出していくのである。クエンティンは、水鬘の花の香りに覆われていくのである。「ぼくはこおろぎのなっている灰色の草の中をはしっていった水鬘の匂いはいよいよはげしくなり水の匂いがした」。¹¹⁾ クエンティンは水鬘の花の匂いに追われることになるのであった。その情景は〈死〉の直前の乱れの象徴として受け取ることができる。

午前中は時間を知らせる鐘の音により行動する。彼自身の〈影〉を踏みしめている位置が時間を象徴していることになる。例えば、正午頃には、自分自身の〈影〉の真ん中に立っている状態が描出されている。光と〈影〉による一日が描かれているのである。次に、第2章の最後の場面すなわち、クエンティンが、悲劇的なカタストロフィーへと入っていく場面を挙げて見よう。

Before I snapped the light out I looked around to see if there was anything else, then I saw that I had forgotten my hat. I'd have to go by the postoffice and I'd be sure to meet some of them, and they'd think I was a Harvard Square student making like he was a senior. I had forgotten to brush it too, but Shreve had a brush, so I didn't have to open the bag any more. ¹²⁾

(明かりを消すまえにまだなにかなかったかと思ってあたりを見まわすと、帽子を忘れていたのに気づいた。ぼくは郵便局によっていかなければならず、そうなるときと学生のだれかに逢うだろう、すると彼らは自分のことを四年生みたいに振舞っているハーヴァード広場にいりびたりのサボリ学生だと思うかもしれない。ぼくは帽子にブラシをかけることも忘れていたが、でも、シュリーヴのブラシがあったので、それ以上手提げカバンをあけずにすんだ。)

上掲のクエンティンの様態は、通常の連続した生活の一部であるかのように描写されている。しかし、「ぼくは帽子にブラシをかけることも忘れていたが、でも、シュリーヴのブラシがあったので、それ以上手提げカバンをあけずにすんだ。」という部分は、ハーヴァー

ド大学の親友シュリーヴのブラシを借りて、自分の帽子にブラシをかけるという動作が、生きている自分の最後のものとなる悲哀が込められている。彼の心を占めているのは、水鬘の花の匂いである。水鬘の花の香りは、コンプソン家の屋敷の香りであり、彼が護らなければならないところでもある。ピューリタンで潔癖感の強いクエンティンの最後の行動となる「それ以上手提げカバンをあけずにすんだ。」という言葉には、堅い響きを感じられる。もしカバンをあけたなら死と逆方向となるということだったので、その堅い響きの中に存在するクエンティンの悲しみは閉じ込められていて、彼の閉ざされた心の奥底には暗闇があり、開くことはできないのである。まるで、開けずにすんだ手提げカバンのようにクエンティンの苦悩は、カバンの中に閉じ込められたまま、生きる世界から離れて彷徨っていくのである。

敷設された物語自体はまったく異なっていながら、その中に存在する人物が、それぞれの事情のもとで自分の姿を自分の目で幻視する〈幻覚現象〉のかたちが相等しい。生き写しの自分を感知している状況がK君と同じように生き写しの自己として分身化した自覚のもとにある佐枝子の二重身もまた、縷々述べてきた中の人物、クエンティンにおける〈自己視幻覚〉¹³⁾と同じであるということでもある。

この〈影〉の問題を『聖書』にまで目を及ばせるならば、『旧約聖書』の「伝道の書」の第8章第13節に、

悪人は神を畏れないから、長生きできず影のようなもので、決して幸福にはなれない。

14)

とあることも視野に入る。ここでの〈影〉は、本来の自己の中に巢食う〈罪〉の意識の乏しい人間を指しての換喩となっている。「悪人は神を畏れないから、長生きできず影のようなもので、決して幸福にはなれない。」という、『聖書』旧約の中にある「伝道の書」(8-13)の言葉は、「静南村」における登場人物の運命的悲劇展開をみていく上で、同作品に深くニュアンスを刻んでいることは疑い得ない。このことを首肯するならば、世間から孤立した感のある佐枝子であっても、その内面は清浄であって、もしキリスト教の門をくぐっていたならば、神の前で〈罪深く〉あっても、前記した換喩としての〈悪〉を抱懐したかたちでのイメージとはならない。実にか弱い女性なのである。佐枝子は決して悪人ではないが、影の中で生きている悲しい女性である。その限りで、佐枝子の悲運は読者に感銘を与えているのである。

ここで花輪莞爾(1936—)が、単行本となった『試みの岸』3部作の中の3作目、「静南村」について述べた批評を挙げて見よう。

第三話「静南村」は、更に難解な暗喩と構成とをもっている。そこでは、第二話では

のめかされた女性(十吉の恋人)の死が語られているのだが、時間的前後関係をばらばらにしてもう一度組みなおした形式をとり、一切を彼女の意識を通して語らせている。すでに述べたような荒々しい流転の天地にふさわしい、内的に思いがけず激しいものを持ったこの女性は、非常に魅力がある。¹⁵⁾

上掲の批評は、その本質を鋭敏に喝破している。花輪莞爾が指摘するように、「試みの岸」、「黒馬に新しい日を」、「静南村」は、作品として互いにゆるくつながっていて、その繋がりゆりのゆるさが逆に含みの大きさになっていると言っている。ことに「静南村」に関しては3部作の締め括りの作品として重要である。ヒロイン佐枝子は、病に犯されているのであって、幻想の世界へと入って行く悲運な女性であるが、激しいものをもっている。

3. 『マクベス』第5幕とクエンティン・コンプソンにおける〈影〉について

シェイクスピアの『マクベス』の第5幕は、現代の我々に問いかけて来るものを持っている。『マクベス』第5幕をフォークナーとの関わりで見ると、その影響下に成り立っているのは、第5幕中の詩との関連である。次にその詩を挙げて類似する点を見よう。

She should have died hereafter.
 There would have been a time for such a word—
 Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow,
 Creeps in this petty pace from day to day
 To the last syllable of recorded time ;
 And all our yesterdays have lighted fools
 The way to dusty death. Out, out, brief candle!
 Life's but a walking shadow, a poor player
 That struts and frets his hour upon the stage
 And then is heard no more. it is a tale
 Told by an idiot, full of sound and fury,
 Signifying nothing. ¹⁶⁾

(そうか。いつかは死ぬはずであった。
 こうゆう知らせを聞く時もあると思っていた。
 明日が来て、明日が去り、一日一日とゆっくり過ぎて、
 やがては時の最後に行きつくのだ。
 昨日という日はすべて、
 馬鹿者どもが塵にまみれた死にいたる道を照らしてきた。

消えろ、消えろ、はかない灯の光！
 人生は歩く影法師、あわれな役者だ。
 束の間の舞台の上で、身振りよろしく動き廻ってみるものの、
 出場てはが終われば、跡形もない。
 白痴の語るお話だ、響きと怒りに満ちている、
 何の意味もありはしない。)

上掲の『マクベス』の第5幕の行句については、様々な反響がある。また、多くの論述がされている。例えば、木下順二は次のように述べている。「この十一行は有名な独白です。このわずか十一行の中から、(略)十五ぐらい、題名をとっている小説や詩やその他のアンソロジーがあるそうです。ぼく自身もこの中の“All our yesterdays”から取って、『あの過ぎ去った日々』という回想録を書きました」¹⁷⁾と。個人の創作事情にも及んだとする木下順二の発言は、このシェイクスピア詩中の重みを暗示している。重要にして注目する見解に筆者は共感する。

アメリカの批評家リチャード・チェイス(Richard Chase, 1914-1962)は、自著 *The American Novel and its Tradition* (1957) に中で、カーヴェル・コリンズ(Carvel Collins, 1912-1990)¹⁸⁾ の名を挙げ、その主張点の一つである、フォークナーの『響きと怒り』のタイトルと主要人物の原型は、『マクベス』の第5幕中の詩行にある、と言っているのである。“full of sound and fury”の詩句と *The Sound and the Fury* というタイトルは、きわめてよく似ているという指摘をしている。筆者の見解は、言うまでもなくカーヴェル・コリンズの見解の通りである。次に、カーヴェル・コリンズの『マクベス』の詩行と『響きと怒り』の関係を見よう。

It seems possible to demonstrate that several elements of *The Sound and the Fury* stem from a systematic exploitation of this Shakespearean passage. ¹⁹⁾

(『響きと怒り』の幾つかの要素は、シェイクスピアの一節の系統的な利用から、生じていることを示すことが、可能であるように思われる)。

このカーヴェル・コリンズの指摘は、フォークナーの『響きと怒り』の創作上の秘密の解明へと導いて行った。カーヴェル・コリンズは、第1章の主人公ベンジャミンや第3章の主人公ジェイソンまた第4章の主人公ディルシーにも言及したが、ここでは主に第2章の主人公クエンティンについて取り上げたい。カーヴェル・コリンズは、クエンティンの〈影〉の描写について次のように述べている。

The second interior monologue, Quentin's, owes one of its often repeated

motifs to the statement by *Macbeth* which immediately follows the imperative about the candle: “Life’s but a walking shadow.”²⁰⁾

(第二番目の内的独白、すなわち、クエンティンの独白のたびたび反復される主題の言葉の一つは、蝋燭を点せば必ず生ずる影に続いて述べられるマクベスによる「人生は歩く影法師」という言葉から取り入れられている。)

上記のようにマクベスの “Life’s but a walking shadow.” 「人生は歩く影法師」は、クエンティンの〈影〉による表現として象徴的に使われているが、これは、『マクベス』詩行からの借用であるとカーヴェル・コリンズは言っている。〈影〉という言葉の響きは、クエンティンが落ち込んだ妄想の世界の表現の一つとして現代の我々にもその悲しみは伝わって来る。

『マクベス』詩行の〈影〉を如何にフォークナーが利用したかというもう一つの例は、カーヴェル・コリンズによって挙げられている。フォークナーには、〈影〉という言葉を使った描写が多くある。次に幾つかの例を挙げて見よう。

“I walked upon my shadow”; “I walked upon the belly of my shadow”; “our shadows running along the wall”; “I stepped on my shadow”; “Trampling my shadow’s bones into the concrete with hard heels”;²¹⁾

(「私は自分の影の上を歩いた」; 「私は自分の影の腹の上を歩いた」; 「壁伝いに走っている影」; 「私は自分の影の上を歩んだ」; 「私は影になって映った自分の骨をかたい踵でコンクリートのなかに踏みつけながら、」)

コリンズは、上記のように『マクベス』の詩行の中にある〈影〉の表現に関して詳細な統計を挙げフォークナーとの関係を確認したものとしたと考えられる。コリンズは、〈影〉という言葉を使用してのクエンティンの独白は、少なくとも45回はあると言っている。²²⁾

クエンティンに関わる〈影〉の描写について、先刻引出の詩行(『マクベス』第5幕中の)当該11行からフォークナーは、〈影〉という言葉を用いて、クエンティンの在り様を描写したことは、カーヴェル・コリンズのいう通りである。両作品の本質を掴みこんで鋭い洞察として注目される。筆者も彼の所見とまったく同様な立場を取っている。クエンティンは、〈影〉の中に生きている。すなわち、幻想の世界を逍遥している存在なのである。そこに彼の悲劇がある。

田中久男は、『ウィリアム・フォークナーの世界』の中で、カーヴェル・コリンズと同様な言葉を述べている。次に田中久男の見解を挙げて見よう。

『響きと怒り』は周知のように、シェイクスピアの『マクベス』の第五幕第五場の主

人公の独白——「人生はただの歩く影、へたな役者だ、自分の時間だけ舞台上でドタバタ動き回り、やがて言葉もなく消えてしまう。白痴の語る物語で、響きと怒りに満ちてはいるが、意味はさっぱり分からない」——の一節からそのタイトルを借用している。「歩く影」がクエンティン、ドタバタ役者がジェイソン、「響きと怒り」に満ちた白痴の物語がベンジーの物語（略）運命の歯車の狂いによって破滅に向かうマクベスの物語は、没落する貴族階級コンプソン家の悲劇の額縁にもなっていることは容易に分かる。²³⁾

この田中久男の所見もまた当該両作品を鋭く穿つての穏当な指摘として納得できるところである。〈影〉については、小川国夫の作品にもフォークナーの作品からの影響があると考えられる。とくに『マクベス』の第5幕の詩の影響が著しいと思われるのである。勿論、小川国夫という作家は、その若き日に『聖書』と出会ったこととあいまって、西洋文学にも深く心酔するところがあった。誰しも一度は出会っていくシェイクスピア作品もまた、小川国夫の読書範囲にあったということである。彼は講演の中で折にふれシェイクスピアの諸作品に言及している。

この事実を勘案するに、「静南村」でも、そうした教養に裏打ちされた『マクベス』からの受容が創意に溶け込んでいることは当然の成り行きである。したがって、フォークナーによる『マクベス』受容と同じパターンでそれに出会い、かつ、そのフォークナーの受容パターンにピッタリ重なるように『響きと怒り』と向き合った小川国夫の創作態度も、ここではきちんと浮き出してくるのである。

(付記)

『響きと怒り』の翻訳にあたっては、講談社文芸文庫の高橋正雄訳『響きと怒り』1999年4月13日第二刷発行を用いた。Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* の翻訳にあたっては、北星堂書店のリチャード・チェース^{まつとりまたき}待鳥又喜訳『アメリカ小説とその伝統』1961年9月5日再販発行を用いた。『マクベス』の翻訳にあたっては、『世界文学大系』12巻、筑摩書房の小津次郎訳を用いた。Carvel Collins, *The Interior Monologues of The Sound and the Fury* の翻訳は筆者である。『聖書』は、日本聖書協会発行、新共同訳1997年を用いた。

注

- 1) 小川国夫『試みの岸』(河出書房新社、1972) 233頁。
- 2) 辻邦生、小川国夫『昭和文学全集』第24巻(小学館、1988)「小川国夫・人と作品、大橋健三郎」。

- 3) フォークナー『響きと怒り』(講談社文芸文庫、1997) 140 頁。
- 4) 小川国夫『試みの岸』(河出書房新社、1972) 327 頁。
- 5) 梶井基次郎は、東京大学英文科中退。志賀直哉の影響を受けた作家。主な作品には、『檸檬』『城のある町にて』がある。(小川国夫は、梶井基次郎からの影響を受けて「静南村」の主人公佐枝子を執筆したことを話された。平成 18 年 4 月 1 日静岡クーポール会館の『小川国夫氏を囲む会』において)。
- 6) 梶井基次郎『檸檬』(新潮文庫、1967) 158-159 頁。
- 7) William Faulkner, *The Sound and the Fury* (New York.: A Division of Random House 1929) p. 152.
- 8) 四方田敏『フォークナーの文体—文学テキストへの言語学的アプローチ』(文化書房博文社 2004) 86 頁。
- 9) 四方田敏 87 頁。
- 10) William Faulkner, *The Sound and the Fury* (New York.: A Division of Random House 1929) p. 155.
- 11) フォークナー『響きと怒り』(講談社文芸文庫、1997) 275 頁。
- 12) William Faulkner, *The Sound and the Fury* (New York.: A Division of Random House 1929) p. 179.
- 13) 小川国夫『小川国夫氏を囲む会』(平成 18 年 4 月 1 日) 佐枝子と十吉の関係はドッペルゲンガーであると静岡クーポール会館において開催されたとき筆者に語った。
- 14) 『聖書』(旧約)、「伝道の書」8 章 13 節、1044 頁。
- 15) 雑誌『波』における書評、花輪莞爾「不思議な明るさと骨太の暗喩—小川国夫著『試みの岸』(新潮社 1972・9) 26 頁。
- 16) William Shakespeare, *Macbeth* (Penguin Books Edited by G. K. Hunter 1967) p. 132.
- 17) シェイクスピア『マクベス』(岩波文庫 1997) 171 頁。
- 18) Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Baltimore and London : The Johns Hopkins UP, 1980) p. 234.
- 19) Carvel Collins, *The Sound and the Fury Compiled by James B. Meriwether* (The Interior Monologues of *The Sound and the Fury*) p. 61.
(付記—上記カーヴェル・コリンズの論文の中における『マクベス』の詩行に対してリチャード・チェイスは、異論を述べている。この両氏の論争を取り上げて、カーヴェル・コリンズに同調した論を展開したのは、村上^{むらかみ} 東^{あきら}である。村上^{むらかみ} 東^{あきら}の論文の題名はつぎの通りである。『Carvel Collinsnos の “*The Interior Monologues of The Sound and the Fury*” について』筆者は、村上東の論を首肯するので、リチャード・チェイスの論文についての言及は省略する)

- 20) Ibid, p. 62.
 21) Ibid, p. 62.
 22) Ibid, p. 62. (“shadow” .This word recurs at least forty-five times in Quentin’s monologue,) 〈影〉というクエンティンの独白の言葉は少なくとも 45 回繰り返されたとカーヴェル・コリンズは述べている。
 23) 田中久男『ウィリアム・フォークナーの世界—自己増殖のタペストリー—』(南雲堂 1997) 115 頁。

参考文献

—日本語文献—

【単行本・小川国夫作品】

- ・ 小川国夫『小川国夫の手紙』海豹社、1953～1956
- ・ 小川国夫『試みの岸』河出書房新社、1972
- ・ 小川国夫『小川国夫作品集』1～6、別巻、河出書房新社、1974～1976
- ・ 小川国夫『小川国夫全集』1～14、小沢書店、1992～1995
- ・ 小川国夫『マグレブ、誘惑として』講談社、1995
- ・ 小川国夫『ハシッシ・ギャング』文芸春秋社、1998

【翻訳書・フォークナー作品】

- ・ フォークナー、滝口直太郎訳『フォークナー短編集』新潮文庫、1955
- ・ フォークナー、加島祥造訳『八月の光』新潮文庫、1967
- ・ フォークナー、高橋正雄訳『八月の光』河出書房新社、(世界文学全集 45) 1970
- ・ フォークナー、阪田勝三訳『フォークナー全集』第 8 巻、富山房、1973～1995
- ・ フォークナー、高橋正雄訳『響きと怒り』講談社文芸文庫、1997
- ・ フォークナー、高橋正雄訳『アブサロム、アブサロム！』上下、講談社文芸文庫、1998
- ・ フォークナー、佐伯彰一訳『死の床に横たわりて』講談社文芸文庫、2000

【内外の関連書物】

- ・ 梶井基次郎、『檸檬』新潮文庫、2003
- ・ シェイクスピア、木下順二訳『マクベス』岩波文庫、1997
- ・ 世界文学大系 12、中野芳夫・小津次郎・西川正身・三神勲・木下順二・斉藤勇訳『シェイクスピア』筑摩書房、1959

【研究書】

- ・ 蟻 次郎『フォークナーの小説群』——その〈全体化〉理論の展望——南雲堂、1966.
- ・ 大橋健三郎・斉藤光・大橋吉之助編『アメリカ文学史』研究社、1975
- ・ 大橋健三郎、『ウィリアム・フォークナー研究全1巻』南雲堂、1996
- ・ 岡庭昇『フォークナー—吊るされた人間の夢—』筑摩書房、1975
- ・ 荻田元司・佐藤亮一・高村勝治他訳、『アメリカ小説論』V・O・A編 (THE VOICE OF AMERICA'S FORUM LECTURES ON THE AMERICAN NOVEL)、(Published in Japanese translation with permission of the Voice of America) 北星堂、1967
- ・ 木田献市・西村俊昭・他『聖書の世界』I～VI、講談社、1970
- ・ ジョン・フォークナー、佐藤亮一訳『響きと怒りの作家—フォークナー伝—』荒地出版社、1964
- ・ 新鋭作家叢書『小川国夫集』河出書房新社、1971
- ・ 勝呂奏『小川国夫文学の出発—アポロンの島—』双文社、1993
- ・ 勝呂奏『荒野に呼ぶ声—小川国夫文学の樞奥—』審美社、2000
- ・ 田中久男『ウィリアム・フォークナーの世界』南雲堂、1997
- ・ 平石貴樹『メランコリック デザイン』南雲堂、1993
- ・ 平石貴樹『小説における作者のふるまい—フォークナー的方法の研究—』松拍社 2003
- ・ よもたきとし 四方田 敏『フォークナーの言語と文体—言語学的アプローチ—』文化書房博文社、1997
- ・ リチャード・チェース、待鳥又喜訳『アメリカ小説とその伝統』北星堂書店、1960

【雑誌等】

- ・ 「英語青年」 第127巻第5号、研究社、1981・8
- ・ 大橋健三郎「無言の交友」(『小川国夫全集』3、付録) 小沢書店、1992・1
- ・ 大橋健三郎「フォークナーと日本の小説—5—『旅』と『故郷』・小川国夫の場合」
- ・ 「解釈と鑑賞」(特集・小川国夫と古井由吉) 第182号、至文堂、1977・3
- ・ 「解釈と鑑賞」(特集・内向の世代 最後の純文学) 第71巻6号、至文堂、2006・6
- ・ 「国文学」(現代作家便覧) 第35巻第6号、学燈社、1990・5
- ・ 花輪莞爾「不思議な明るさと骨太の暗喩—小川国夫著『試みの岸』—」(書評)「波」第6巻第8号、新潮社、1972・9
- ・ 平石貴樹「『八月の光』の作者のふるまい」1～12、「英語青年」第145号、研究社、1999・4～2003・3
- ・ 「藤枝文学舎ニュース」第1号～第58号、藤枝文学舎を育てる会発行、1991・8～2006・10
- ・ 福田はるか「小川国夫『ヨレハ記』におけるメッセージ——キトーラ譚の中から」「三

田文学」第 86 号、2006・8

- ・ 村上 東^{あきら}「Carvel Collins の “The Interior Monologues of The Sound and The Fury ” について」秋田大学教育学部研究紀要 人文科学 社会科学[ISSN:0387-0103](秋田大学附属図書館)39 1988・7 p. 61-71
- ・ 「ユリイカ」〈特集・フォークナー〉第 29 巻第 15 号、青土社、1997・12

—英語文献—

【単行本・フォークナー作品】

As I Lay Dying / Light in August / Absalom, Absalom! / Collected Stories / The Sound and the Fury (New York. Vintage International Vintage Books, A Division of London House, Inc.) 1929-1948

【研究書】

- ・ Chase, Richard *The American Novel And Its Tradition* (Princeton Baltimore and London The Johns Hopkins UP) 1956
- ・ Shakespeare, William *Macbeth* (London, Penguin.Books Ltd.)1967
- ・ *The Merrill Studies in The Sound and the Fury* (Compiled by James B.Meriwether University of South Carolina) 1970
- ・ *The Holy Bible*, (printed for the outreach ministry of the American Bible Society by the Zondervan Corporation with permission from the International Bible Society.)1973
- ・ *William Faulkner six decades of criticism* (Edited by Linda Wagner-Martin Michigan State UP) 2002